

# 私の通学路にお父さんが・・・

高橋 ひかる

私のお父さんは、工む店を経営し大工として仕事をしていきます。しかし、お父さんの大工すがたは、ほとんど見たことがありませんでした。お父さんは、帰ってきたら、すぐにごはんを食べ妹をおふ呂に入れ、テレビを見ています。お父さんが、どんなふうに住事をしているかなんて考えたことがありませんでした。

そんなある日、お父さんが、「ひかるの通学路に家を建てることになったから、毎日、顔を出して帰らな。」

と、私に言いそれを聞いた私は、お父さんの仕事を見ることができると、飛びはねてよろこびました。それから私は毎日工事げん場によって帰ることが日っかになりました。しよく人さんが面白い話をしてくれたり、お菓子くれたり、ときには、気づかないぐらゐ集中して仕事をしている日もありました。毎日お父さんがいました。

太陽がざらざら照りつける暑く下校するのもやつとなくらいの日にも通りに友達と下校していると滝のような汗をかいているお父さんが私に手をふっていました。そしたら、私の友達がお父さんを見て、「ひかるちゃんのお父さんすごい汗だね。」

と、言いました。それを聞いた私は、顔から火が出るほどはずかしくなつてしまい、手もふらず、走つて帰つてしまいました。お父さんのことが気になりおそるおそるふり返つたら仕

事にとりかかっていました。私は、何であんなたい度をとつてしまったのか、もやもやしながら家に帰りました。家に着いてからも、お父さんが帰ってきたら何で言おうかお父さんがおこつているかと色々考えました。夜になりお父さんが帰つてきました。私は目を合わせずに「お帰り。」といつも通りの声をかけました。お父さんは、まるで気にしてないかのような感じでした。私は、ホツとしました。

それからというものはげん場にお父さんの車があれば、「バイバイ、またね。」

と、言いながら帰りました。お父さんが見えなかつたらげん場に入り

「バイバイ。」と声をかけるようにそれからというものはお父さんはずかしいと思うことをやめました。

もう夏休みに入ったので下校時によることはありません。かんせい間近な家をこのあいだ見せてもらいました。私はとてもすてきな家だと思いました。二階のベランダからは、加茂川の火花が見えるとお父さんから聞ききました。お父さんは、お客さんの家族のことを考え、私の家族のことを考えてくれる世界に一人しかない心のやさしく笑顔があふれる最高のお父さんです。私は、お父さんのことがとても大好きです。ずっと一しよにいたいのです。